

令和7年度
大津・南部地域
普及活動実績集



滋賀県大津・南部農業農村振興事務所 農産普及課
(大津・南部農業普及指導センター)
令和8年(2026年)3月

表紙写真の紹介

<p>【左上写真】</p> <p>P5 乾田直播栽培の技術習得による収量の安定化</p>	<p>【右上写真】</p> <p>P14 緑肥を用いた水稻「きらみずき」の栽培</p>
<p>【左中写真】</p> <p>P7 ブロッコリーの産地化を目指して</p>	<p>【右中写真】</p> <p>P6 イチゴ「みおしずく」の生産安定支援</p>
<p>【左下写真】</p> <p>P10 軟弱野菜経営体における花き導入モデルの育成と生産拡大</p>	<p>【右下写真】</p> <p>P4 「びわほなみ」の収量向上への決め手ー後期重点施肥技術のすすめー</p>

はじめに

気候変動に伴う農作物への影響は、収量や品質の低下など農産物の生産に大きな影響を与えています。令和7年産の米の1等米比率は、前年産に比べ大幅に低下しており、施設園芸でも、夏季の安定生産が難しくなっています。また、米の価格は高騰していますが、生産資材や燃料は高止まりしており、農業経営に大きな影響を与えています。また、2025年農林業センサスでは、この5年間で本県の農業経営体数の約1/4が減少しており、担い手の確保・育成も急務となっています。

このため、大津・南部農業普及指導センターでは、持続的で生産性の高い地域農業の展開に向けて、①「担い手の育成と経営の強化」、②「産地の育成と販売力の強化」、③「持続可能で魅力ある農業・農村の振興」を3つの柱として、農業者や関係機関・団体のみなさまと普及指導活動に取り組んでまいりました。

具体的には①新品種や新技術などを活用した栽培技術支援、②新規就農者の確保育成支援、③担い手の経営力強化支援、④産地づくりに向けた組織づくり、⑤集落営農組織の広域連携体制の構築などに取り組みました。

この実績集は、一年間の大津・南部農業普及指導センターの活動内容とその成果をまとめたものです。御協力いただきました農業者のみなさま、関係機関・団体のみなさまに厚くお礼申し上げますとともに、今後の地域農業の振興を図るうえでの資料として活用していただければ幸いです。

今後も、都市近郊である大津・南部地域の特性を活かし、時代の要請と地域のニーズに対応した普及指導活動を進めてまいりますので、御理解と御協力をいただきますようお願い申し上げます。

令和8年(2026年)3月

滋賀県大津・南部農業農村振興事務所
次長(兼農産普及課長) 中村 嘉孝

目次

はじめに

1 普及活動成果事例

I 担い手の育成と経営力の強化

担い手農家に対する経営戦略策定と従業員育成支援	1
新規就農者のメロン・オクラ等での経営安定	2
果樹・花き複合経営の新規就農支援	3

II 産地の育成と販売力の強化

「びわほなみ」の収量向上への決め手ー後期重点施肥技術のすすめー	4
乾田直播栽培の技術習得による収量の安定化	5
イチゴ「みおしずく」の生産安定支援	6
ブロッコリーの産地化を目指して	7
モリヤマメロン部会の活性化に向けて	8
産地活性化に向けた若手生産者の栽培技術習得支援と組合の体制づくり	9
軟弱野菜経営体における花き導入モデルの育成と生産拡大	10
北山田施設野菜団地への緑肥導入	11
データに基づいた栽培管理によるイチゴ高収量の実現	12
水稲「きらみずき」の安定生産を目指して	13
緑肥を用いた水稲「きらみずき」の栽培	14
土地利用型経営体における子実用とうもろこし導入による省力化	15

III 持続可能で魅力ある農業・農村の振興

地域農業活性化に向けた広域連携体制の構築	16
----------------------	----

2 トピックス

大津市における学校給食への取組・水田を活用した花木類栽培の推進	17
担い手の確保・育成に向けて！（指導農業士会・学校連携事業）	18
青年農業者クラブの活動支援	19
表彰事業受章農家の紹介	20
表彰事業受賞農家の紹介	21

3 発信情報

ホームページ・普及現地情報・SNS	22
大津・南部の農業	23

担い手農家に対する 経営戦略策定と従業員育成支援

【普及活動のねらい・対象】

当センターでは、先進的農業者に対する経営状況のヒアリングを実施しています。令和6年度のヒアリングにより、S氏から経営戦略の策定を、T氏から従業員の育成に関して支援要望がありました。そこで当センターではこれらのニーズについて、農業経営支援アドバイザーと連携して支援をしました。

【普及活動の内容】

S氏は数年前に経営を引き継がれ、30haまで急速に面積を拡大された担い手です。規模拡大に伴い、日々の栽培管理作業に追われ、経営状況の数値的な把握や今後の計画策定ができておらず不安を抱えておられました。農地を預ける耕作者が年々増えており、今後も耕作面積の拡大が予想されます。当センターでは、まず管理会計による現状の把握を提案し、実践を支援しました。その上で、農業経営支援アドバイザーとともに、経営計画の作成支援に着手しました。



従業員育成研修会

T氏は稲・麦・大豆に加え施設園芸にも取り組む大規模複合経営体で、従業員の仕事に対する意欲向上を図る取組を検討されていました。そのため、当センターが開催する従業員育成研修会への参加を促し、管内で同様の課題を抱える担い手同士が、従業員の役割の明分化や適性に応じた仕事の分担について意見交換できる場を設けました。また、研修後に、現在の従業員の役割分担を見直し、それぞれの将来像の検討や、従業員の育成計画をすすめるために、県域で開催される右腕育成研修会への参加を誘導するなど、計画作成を支援しました。

【普及活動の成果】

S氏は現状の経営状況を踏まえ、5年間の機械更新や施設拡大、雇用について可視化した計画を作成されました。それにより、投資の優先順位が明確にされました。さらに、一連の取組により、家計と事業の分離による経営の明瞭化や雇用確保を目的として令和8年中に法人化されることになりました。

T氏はこれまで固定化していた役割を、従業員の能力を考慮しつつ柔軟に対応する分担に見直されました。従業員は新たな品目の栽培管理を任せられ、環境が変化したことで技術習得などに意欲的になったと実感されています。さらに部門ごとで従業員自身が判断し、対処できる体制を検討しており、マネジメント能力を習得する育成計画を作成され、右腕となる従業員の育成に意欲を示されています。

新規就農者のメロン・オクラ等での経営安定

【普及活動のねらい・対象】

草津市認定新規就農者のU氏は、県内の園芸専門学校や県内外の農業法人等のもとで野菜の栽培技術を学んでこられました。令和7年1月に同市内の温室を購入し、認定新規就農者として経営を開始されました。

U氏の経営が早期に安定するよう栽培管理能力や経営管理能力の向上に向けて支援しました。

【普及活動の内容】

(1)栽培管理能力の向上

U氏は、春にメロンとオクラを、秋にレタスとキュウリ等を主体に経営開始されています。当センターは、メロン、オクラ、レタスなど栽培のポイントとなる時期に巡回指導を行い栽培管理能力の向上を図りました。併せて、近年は夏期高温となることから遮熱塗料や外気導入、敷きわらなどの高温対策について助言しました。

(2)経営管理能力の向上

自身の経営状況の把握と改善に向けて、当センターや関係機関が開催する経営研修会への参加と簿記帳の実践を働きかけました。



キュウリの収穫作業を行うU氏

【普及活動の成果】

病虫害の適期防除、メロンの温湿度管理、レタスの播種時の温度管理などの重要な栽培管理を理解し、実践されました。一部高温により発芽不良や葉焼け被害が発生しましたが、すぐに対応をすることで被害を最小限にすることができ、おおむね計画どおりの経営をされています。

また、経営研修会に複数参加し、積極的に講師に質問するなど早期の経営安定に向けて意識が向上しています。さらにパソコン簿記ソフトを活用し経営状況の把握に向けて入力をされています。

今後も早期に経営が安定し、地域の担い手として活躍されるよう支援していきます。



経営研修会の風景

果樹・花き複合経営の新規就農支援

【普及活動のねらい・対象】

守山市認定新規就農者のK氏は、民間企業を退職後、県内2戸の果樹農家のもとで2年間の研修を受け、令和7年4月からナシ26a、ブドウ20a、小ギク10aの栽培による農業経営を開始されました。基本的な栽培技術は研修で習得されていますが、自らの判断で管理し、農業経営を行うのは初めてでした。そのため、就農計画1年目から目標を達成し、長期にわたり自立的な農業経営につながるよう、栽培技術と経営管理能力の習得に向けて支援しました。

【普及活動の内容】

ナシとブドウについては、定植から剪定などの基本的な管理技術、土壌分析結果に基づいた施肥、棚づくりについて現地指導しました。梅雨時期や高温時期に防除が遅れたことから、一部で生育不良が生じたことを受け、月初めに作業の流れと当月の重点作業を確認する場を設けました。

小ギクは栽培経験がなかったため、現地指導に重点を置き、栽培管理の流れが理解でき、作業技術を習得できるよう支援しました。夏季の異常高温に対しては、育苗期間の遮熱資材の利用や、葉面散水の実施について提案し、対応を促しました。

経営面では、複合品目による経営のため、部門別の会計や労務管理が重要であることを説明するとともに、当センター主催の若手農業者向け会計管理実践研修会への出席を促しました。労務管理は作業時間を日ごとに記録するように提案しました。

【普及活動の成果】

ナシとブドウ、小ギクについて、現地での伴走支援により、栽培管理の流れを理解され、実践に移すことができました。月ごとに作業を明確化し、優先順位を整理したことで、計画的な管理の実践につながりました。小ギクでは、夏場に高温の影響で開花が遅れ、計画どおり収穫ができず苦労されましたが、秋以降は予定どおり開花し、目標の80%にあたる本数を出荷されました。次年度に向けては、高温に強い品種選定を進めています。

経営面では、経費を部門別に整理し、作業時間も細かく記録されました。今後、果樹の収穫が本格的になってくる年に備え、経営判断に関わる記録を積極的に収集されています。

今後も早期に経営が安定し、地域の担い手として活躍されるよう支援していきます。



ナシの誘引作業の指導

「びわほなみ」の収量向上への決め手 —後期重点施肥技術のすすめ—

【普及活動のねらい・対象】

大津・南部地域の小麦は、県とJAで連携し令和4年産から多収で実需者からの評価が高い「びわほなみ」への品種転換を進めてきました。令和6年産には野洲市で、令和7年産からは新たに守山市・草津市でも栽培が開始されました。今回、野洲市および守山市の生産者を対象に「びわほなみ」の品種特性を發揮できる後期重点施肥技術の普及を図るため、技術の認知度を高めるとともに、技術に取り組む生産者に対して技術習得の支援を行いました。

【普及活動の内容】

「びわほなみ」は赤かび病に弱いものの、収量性および製粉適性が高い品種です。また、^{たんかん}短稈で倒伏しにくいことから後期重点施肥による多収栽培が可能です。しかし、技術導入を図るには、排水対策や赤かび病防除の徹底に加え、地力や生育に応じた施肥量の設定や、施肥作業の省力化など課題があります。

このため当センターでは、「びわほなみ」の後期重点施肥技術の普及拡大に向けて以下の活動に取り組みました。

(1) 栽培管理研修会の開催・技術情報の発信

後期重点施肥技術の取組生産者の拡大を図るため、農業センターと連携して小麦播種前に栽培研修会を開催し、この中で後期重点施肥技術のPRを行いました。また、併せて穂肥や実肥、赤かび病防除など技術情報を発信し栽培支援を行いました。

(2) 実証ほの設置および現地研修会の開催

後期重点施肥による多収モデルとなる生産者の育成のため、JAと連携して実証ほを設置し、定期巡回を通じて栽培管理の支援を行いました。また、実証ほを活用して、穂肥研修会や施肥実演会などの現地研修会を開催しました。

【普及活動の成果】

栽培研修会でPRを行ったことから、後期重点施肥技術に興味を持つ多くの生産者が現地研修会に参加され、生産者同士でも情報交換が行われるなど有意義な研修会となりました。また、実証ほの平均単収は、635kg/10aと目標を大きく上回り、後期重点施肥による「びわほなみ」の収量向上が実証できました。

しかし、令和7年産の「びわほなみ」は、県内全般にわたり成熟期以降の連続した雨による倒伏や、穂発芽粒・赤かび粒の発生により品質が大きく低下してしまいました。

令和8年産小麦の生産に向けて、令和7年産小麦の反省を生かしつつ「びわほなみ」の収量・品質が高まるよう支援を続けます。



「びわほなみ」栽培研修会

乾田直播栽培の技術習得による収量の安定化

【普及活動のねらい・対象】

農家数の減少に伴い、1経営体あたりの経営面積が急拡大しており、大規模土地利用型経営体では、省力化や作期分散できる技術が求められています。特に水稲移植栽培は、移植時期に労力が集中することが、作付面積拡大の妨げとなっています。

そこで、作期分散が可能な乾田直播栽培に着目し、今後、経営面積のさらなる拡大が見込まれる3法人を対象として、技術習得による収量の安定化を目指しました。また、対象の法人を起点に地域への波及を図る活動にも取り組みました。

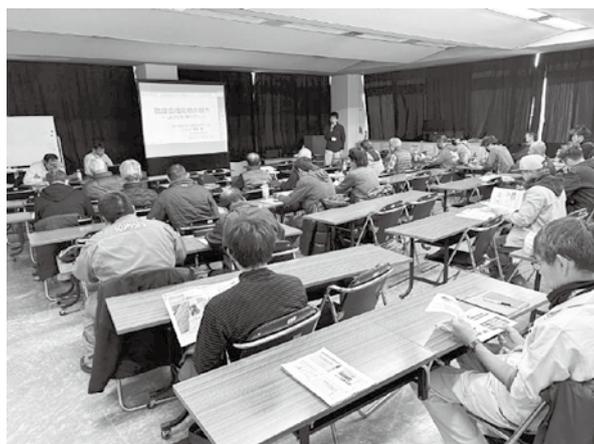


現地検討会

【普及活動の内容】

3法人の取組は、初年度であったため、播種前作業、播種方法、漏水対策、雑草対策、施肥管理について、ポイントとなるタイミングで適宜作業が実施できるように重点的に指導を行いました。また、現地検討会を開催し、生産者同士の情報収集や意見交換を促すことで、互いの技術を高めあう環境を形成しました。

さらに、管内での技術普及を目的として、対象の取組結果をもとに、大規模土地利用型経営体向けの栽培勉強会を開催したほか、JAのTACおよび営農指導員向けの研修会も実施し、技術支援体制の強化を図りました。



栽培勉強会

【普及活動の成果】

3法人における乾田直播取組ほ場の実収量は、630～672kg/10a(にじのきらめき)と高水準となり、目標とした移植栽培と同水準の収量を確保できました。少人数で作業できる点や播種が3月から開始できるため、作期が分散できる点についても実感され、次年度は3法人とも取組面積を拡大することとなりました。

また、現地検討会や研修会を通じて、大津・南部地域における関心が高まり、次年度の取組者数は倍増することが見込まれています。

今後、技術普及を進めることで、大規模土地利用型経営体の省力化や作期分散を実現し、経営面積が拡大できるよう支援を進めていきます。

イチゴ「みおしずく」の生産安定支援

【普及活動のねらい・対象】

大津・南部管内ではイチゴ「みおしずく」の市場等を通じた出荷に取り組む生産者組織があります。生産者組織からは、生産安定を求められています。しかし、近年の異常気象による苗数不足や収量・品質向上が課題となっています。令和7年産は収量4t/10aを目標に、夏季高温対策を含めた育苗管理と本ぼでの栽培管理を支援しました。

【普及活動の内容】

(1) 研修会での全体支援

研修会では、高温対策技術として、ハウスビニル資材、遮光資材、外気導入、ミストなどを紹介しました。また、生産安定に向け、品種特性と花芽分化を考慮した定植時期の提案や定植後の温度管理と培養液管理について説明しました。さらに、生産者同士でランナー発生状況や出蕾状況、天敵の活用方法などの意見交換を行いました。



育苗研修会

(2) 現地巡回による栽培管理の個別支援

現地巡回により、育苗時期は温度管理やかん水量を助言し、苗数確保が早期に完了するよう指導しました。本ぼでは、生育状況を確認しつつ、温度管理や養液管理を助言しました。また、炭酸ガス発生装置を導入している生産者に対しては、炭酸ガス濃度の計測と施用により、生育に適した環境作りができるよう支援しました。



野菜担当による現地巡回

【普及活動の成果】

研修会や現地巡回による支援の結果、苗数が十分確保でき、花芽分化も大きく遅れることなく年内からの出荷につながりました。また、遮光資材や外気導入技術、炭酸ガス発生装置を一部の生産者が導入され、その効果を実感されました。収量4t/10a以上を確保できた生産者は7人で、中には6t/10aを超える生産者もあり、市場出荷量は令和6年12月から令和7年6月にかけて、大津・南部と高島地域を合わせて約2.8万パックとなりました。

令和7年産についても12月上旬から順調に出荷が始まっています。今後も関係機関と情報共有しつつ、生産力を高め、イチゴ産地として滋賀県をけん引できるよう支援を継続していきます。

ブロッコリーの産地化を目指して

【普及活動のねらい・対象】

土地利用型経営体のさらなる所得増大を目的に令和5年度からJAレーク滋賀と連携して市場出荷向けブロッコリーの産地化を進めています。令和6年度は13名、120aで栽培されましたが、令和7年度には市場からさらなる生産増大が求められています。

また、中生品種と晩生品種の収穫時期が切り替わる1～2月に市場への出荷量が減少したことや品質のばらつきが問題となりました。そこで、市場への安定出荷と栽培面積拡大に向けて支援しました。

【普及活動の内容】

(1)栽培管理支援

市場に安定して出荷できるよう、栽培実績や品種特性を踏まえて作付体系を見直し、6月の栽培研修会で安定出荷のための栽培のポイントについて指導しました。

定植後は、JAと連携した計画的なほ場巡回を行い、生育状況を確認して適期に栽培管理できるよう指導しました。

また、令和7年度はJAと協議のうえ、市場の需要に応じた出荷規格に変更しました。10月には市場担当者を交えて目合わせ会を開催し、出荷規格を遵守できるよう生産者の理解を促しました。

(2)栽培面積拡大支援

新規栽培者の確保にあたっては、生産から出荷の流れや経営収支等を記載した推進資料を作成し、土地利用型経営体を中心に推進しました。栽培意向のあった生産者に対して、説明会を開催し、労働力に応じて作期分散ができるように作付体系を提案しました。



安定出荷に向けた栽培説明会



花蕾の生育状況を生産者と確認

【普及活動の成果】

栽培管理支援の結果、出荷は早生品種の11月から開始し、計画どおり途切れることなく継続することができました。出荷規格の見直しにより品質も向上し、大津・南部地域での10月末～11月時点の平均販売単価は昨年度よりも高い484円/kgとなりました。また、栽培面積拡大支援の結果、令和7年度は新規栽培者が5名増加し、栽培面積は205aまで拡大しました。今後も、ブロッコリーの安定生産と産地育成に向けて継続して支援していきます。

モリヤマメロン部会の活性化に向けて

【普及活動のねらい・対象】

モリヤマメロン部会は、メロンの生産を開始して48年が経過した歴史ある部会で、平成5年には販売金額約2億円、面積約10ha、部会員数55人と県下最大のメロン産地でした。しかし、令和2年には販売金額が1億円を下回り、令和5年に面積約2.7ha、令和6年に部会員数19人まで減少し、かつての活気が失われつつありました。

そこで、部会の活性化を目的に、令和2年から生産・新規栽培者育成・販売の3つの面から課題解決に取り組んでいます。令和7年は新規栽培者育成と販売を中心に支援しました。

【普及活動の内容】

(1) 新規栽培者育成支援

当センターから部会やJAに働きかけ、従来からあったトレーニングハウス研修制度の活用に加え、メロンの新規栽培者に対して部会のベテラン生産者を指導担当者として位置付け、技術指導する体制づくりを支援しました。

(2) 販売戦略策定支援

生産量が回復してきたことを受け、部会やJAに対して、安定した販売につながるよう販売戦略の策定を提案し、プランナー派遣を活用しつつ、SWOT分析や3C分析などの支援を行い、販売戦略の策定に取りかかりました。

【普及活動の成果】

新規栽培者育成の必要性が部会で認識され、ベテラン生産者3人が新規栽培者3人に対して定期的な栽培指導を実施することができました。次年度も師弟関係を継続することとなり、新規就農者が安心して就農できる環境が整いつつあります。

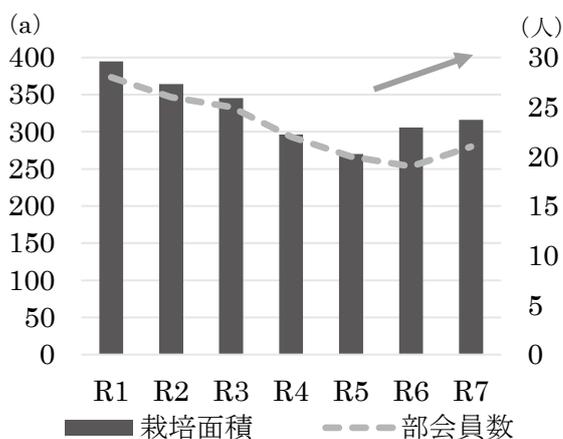
販売戦略の策定は、プランナー等からの意見を踏まえ、2年後に控える部会設立50周年を目指して戦略を立て始めたところです。

令和7年は、栽培面積約3.2ha、部会員数21人、販売金額約1.2億円と少しずつ回復しており、部会の活性化につながりました。

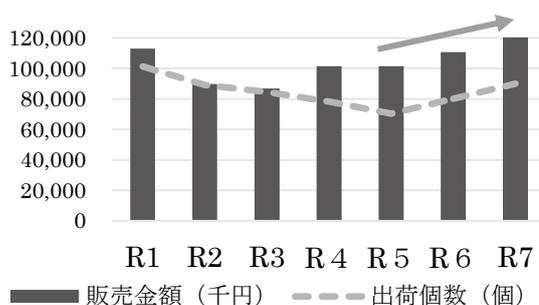


プランナーとの販売戦略検討会

R1～R7の栽培面積・部会員数の推移



R1～R7の販売金額・出荷個数の推移



産地活性化に向けた若手生産者の 栽培技術習得支援と組合の体制づくり

【普及活動のねらい・対象】

今浜いちじく生産組合は生産者の高齢化や後継者不足により、一時は産地の危機にありましたが、令和3年以降、5名の認定新規就農者が加入し産地の世代交代が進みました。新規就農者の中には、成園の引継後に就農計画の目標収量に達していない方や技術面で不安を抱えている方がいます。そこで、新規就農者を対象に生産目標達成に向けた技術支援と、組合員による栽培技術の継承を支援しました。

併せて、令和6年1月に設立した産地協議会の活動と、組合の体制づくりも支援しました。

【普及活動の内容】

(1)生産目標達成に向けた技術支援

熟練度に合わせた対応を行うため、新規就農者に対しては定植や施肥の指導を、就農後5年目の生産者にはかん水や防除方法、収穫・調製などを個別巡回で指導しました。

(2)技術継承の支援

組合内で新規就農者に対する技術継承が行える仕組みづくりを作るために、熟練生産者を講師とした芽かき、摘心、目合わせ研修会などを開催し、その運営に対する支援や情報提供などを行いました。

(3)組合活動の体制づくり

産地協議会において、関係機関と連携し、人材・園地戦略、流通・販売戦略、生産戦略について検討を行いました。

【普及活動の成果】

個別巡回指導により適期作業を指導した結果、新規就農者の単収は昨年から約2割増え、2.0t/10aに改善し、安定した収益につながりました。

また、組合長が新規就農者に対して栽培のポイントや収穫時期について研修会の中で説明を実施できるように支援した結果、組合内での技術継承される仕組みができました。

さらに、新たに55aのイチジクが新植され、産地の活性化が期待されますが、面積増加に伴う経営全体の労働配分等についても支援をしていきます。

産地協議会の中では特に流通戦略に関して話し合わせ、組合員同士が販路についてより綿密に情報交換を実施し、需要に基づいた販売を行うことが決まりました。



熟練生産者による芽かき指導



目合わせ研修会

軟弱野菜経営体における花き導入モデル の育成と生産拡大

【普及活動のねらい・対象】

管内の施設野菜経営では、軟弱野菜を中心に高温による収量低下が問題となっており、夏季高温化でも栽培可能な新たな品種や品目への転換が検討されています。令和6年にアスターを守山市の施設野菜経営体F氏に提案・支援した試作では、軟弱野菜と比較して収益性が高くなりました。一方で、コナジラミ類による被害が発生し、出荷率の低下や薬剤防除の負担が大きくなりました。そこで、F氏をモデル経営体に、軟弱野菜経営体の夏季の収益向上を目的としたアスター導入を推進するため、害虫対策について支援するとともに、関係機関と連携して地域への推進活動を行いました。

【普及活動の内容】

(1) 導入モデル経営体への害虫対策技術支援

コナジラミ類の被害の軽減には、侵入防止を目的とした防虫ネットの効果が高いため、ハウスサイド等に0.4mm目合いのネットを展張する実証ほを設置しました。また、防虫ネットの設置による高温対策として、遮熱ネットや外気導入ダクトファンを組み合わせた実証ほも合わせて設置しました。

(2) 花き栽培の推進活動

関係機関が足並みをそろえ、花き導入の取組が面的に拡大されるよう、地域農業センター、JAレーク滋賀や市役所と、実証ほを活用した生産拡大会議（現地検討会）を開催しました。また、守山市、野洲市の施設野菜経営体を対象として、花き導入推進研修会を開催し、推進をはかりました。



F氏の栽培ハウスを視察する関係機関

【普及活動の成果】

実証の結果、コナジラミ類の発生を栽培期間の終盤まで抑えることができ、薬剤散布の回数が大きく減りました。懸念された高温も対策を実施したことで影響はなく、出荷率は令和6年の75%から88%に改善し、夏季の安定生産技術を確立できました。

また、関係機関と現地の課題、技術導入を共有しながら進めたことで、守山市、野洲市と連携し花き栽培導入に関心のある施設野菜経営体を掘り起こすことができたほか、推進研修会で夏季のアスター導入の優位性を紹介したことから、令和8年は3経営体が取組み意向を示されています。

今後も取組を推進するとともに、管内全域への波及を目指して、関係機関と連携した栽培技術支援体制をすすめ、集出荷体制の確立について検討をしていきます。

北山田施設野菜団地への緑肥導入

【普及活動のねらい・対象】

旧草津川の河口付近に広がる北山田施設野菜団地は、2,000棟を超えるハウス群でしたが、高齢化や後継者不在などで空きハウスが増えています。規模拡大を進めている生産者もおられますが、現在は1,900棟程度まで減少しています。また、安定生産のための堆肥施用についても体力的に困難となってきており、土づくりができないほ場が増えています。

そこで、比較的労力を必要としない土づくりとして緑肥栽培を導入することで、安定した野菜生産が継続できるよう北山田施設野菜生産者を対象に支援しました。

【普及活動の内容】

(1) 緑肥の推進および研修会の開催

土づくりや緑肥栽培の基本、土壌分析結果の見方とその対応について土づくりの研修会を3回開催しました。また、普段の巡回指導の中で緑肥の効果等を説明するとともに、土づくりが課題となっている生産者には緑肥の導入を働きかけました。併せて、北山田の野菜出荷組織である湖南中央園芸組合の月例会等でも取組を紹介しました。

(2) 実践支援

緑肥を栽培した生産者のほ場を巡回し、すき込み適期の判断などの助言を行うとともに、緑肥栽培前後の土壌分析を行い、分析結果をもとに土づくりを指導しました。

【普及活動の成果】

研修会には、毎回若手を中心に4～7名の生産者が参加され、毎回、土づくりについて多くの質問がありました。

緑肥を栽培したことのある生産者は6名おられましたが、この活動を通じて新たに2名が緑肥を導入されました。

また、今後も推進するため、緑肥栽培に関する聞き取りを行い、栽培上の課題がすき込み作業であることがわかりました。すき込み作業の課題を解決するために、緑肥導入生産者グループでハンマーナイフモアの導入を検討していくこととなりました。

次年度は、ハンマーナイフモアの実演や土壌分析により土壌の変化も確認しながら緑肥栽培の導入を支援していきます。



土づくり研修会



緑肥(メートルソルゴー)の栽培

データに基づいた栽培管理による イチゴ高収量の実現

【普及活動のねらい・対象】

野洲市の認定新規就農者N氏は、令和6年3月に滋賀県立農業大学校養成科を卒業されました。就農は野洲市で農地を確保され、認定新規就農者としてパイプハウス1,200㎡を建設し高設イチゴ栽培に取り組まれています。

しかし、パイプハウスの建設は資材高騰のため、想定以上の高額となりました。そこで、ハウス環境のモニタリングの活用や栄養診断技術の習得による高収量生産を目標に技術支援しました。

【普及活動の内容】

12月上旬から収穫することを目指し、育苗期から収穫終了まで環境モニタリング機器により、ハウス内の温湿度や炭酸ガス濃度を計測し、得られたデータをもとにして栽培に最適な環境に近づけられるよう支援しました。

特に本ぽでは積極的な炭酸ガス施用を指導し、収穫終了まで連続して収穫できる管理を指導しました。また、植物体の栄養状態を確認し、「みおしずく」や「章姫」など品種ごとの特性と生育ステージに合わせた養液管理についても指導しました。

さらに、病害虫防除は、収量が長期間安定するよう天敵製剤を積極的に活用した防除体系の導入を指導しました。



育苗期の硝酸イオンチェック

【普及活動の成果】



みおしずくの収穫

育苗期間中は高温が続きましたが、計測データと生育状況に応じたかん水や施肥を実践した結果、目標苗数を確保されました。

本ぽでは、ハウス環境のモニタリングデータに基づくハウス環境の調節や葉柄中の硝酸イオン濃度に応じた養液濃度の管理を実践されたことで、12月上旬から収穫が開始できました。また、冬季の草勢を維持されたこととあわせて、病害虫の発生を抑えることができ、7月上旬まで収穫されました。

これらの技術を習得されたことで、就農計画の目標収量3.5t/10aを大きく上回り、栽培終了時点で7.2t/10aの収量を確保されました。

次作は苗質向上等に取り組み、8t/10aとなるよう技術の向上を目指しておられます。当センターでは、高収量を確保し、早期に経営が安定するよう支援を続けています。

水稻「きらみずき」の安定生産を目指して

【普及活動のねらい・対象】

「きらみずき」は大粒でしっかりした食感とみずみずしい甘さが特徴の良食味米であり、高温登熟性や耐倒伏性に優れ、近年の異常高温下でも収量や品質の安定が見込める品種として期待されています。

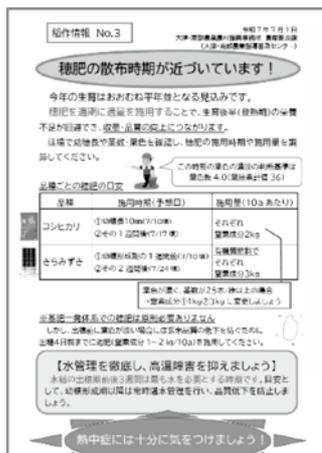
しかし、栽培方法が「オーガニック栽培」や「化学肥料や殺虫・殺菌剤を使用しない栽培」に限定されているため、生産者によって収量や品質の差が大きくなる課題がありました。

そこで、安定生産を目指して、モデル生産者を対象にした栽培管理支援と、管内全域の生産者に対する情報発信を行いました。

【普及活動の内容】

モデル生産者は、きらみずきの栽培面積が多い経営体を管内各市から1名ずつ選出し、オーガニック栽培1地点、化学肥料や殺虫・殺菌剤(化学合成農薬)不使用栽培5地点の合計6地点を調査ほ場としました。調査ほ場では生育や病害虫発生の調査を行い、その結果をモデル生産者と共有し、それぞれの状況に応じた栽培管理を支援しました。

上記の調査結果や管内生産ほ場の概況を踏まえ、JAと連携してポイントとなる時期に栽培管理情報を作成し、管内全域に向けてチラシやSNSで発信しました。



現地における収量調査

生産者に向けた情報発信

【普及活動の成果】

モデル生産者での生育は概ね順調で、6地点の収量は414～671kg/10a、平均収量は516kg/10aでした。一部のほ場で葉もちの発生がみられたことから、オーガニック栽培で使用可能な薬剤による防除を提案することで感染拡大を抑えることができ、限定される薬剤での防除効果が再確認できました。全体的に高収量となりましたが、一部のほ場では穂数不足に起因する低収量となり、外観品質も大きく低下しました。生育調査や生産者への聞き取り結果から、生育期間中に葉色が落ちたことが大きな原因と考えられました。今後、これらの結果は、きらみずき栽培者研修会などの機会をとらえて広く情報発信していきます。

緑肥を用いた水稲「きらみずき」の栽培

【普及活動のねらい・対象】

水稲「きらみずき」の栽培は「オーガニック栽培」、または「化学肥料や殺虫・殺菌剤を使用しない栽培」に限定しており、環境にやさしい栽培を推進しています。一方で、これらの栽培方法では肥料代が高くなることや、化学肥料を使用した他品種と比較して収量が減少するといった課題があります。肥料代を抑える方法として、緑肥「ヘアリーベッチ」の活用を提案し、その上で収量を向上させるモデル経営体を作ることを目指して、大津市のM氏と栗東市のK営農組合を対象に活動をしました。

【普及活動の内容】

ヘアリーベッチの生育量目標は、「きらみずき」栽培暦の施肥窒素量から3t/10aを確保することを目標に設定しました。ヘアリーベッチは湿害に弱いことから、明きよの設置を指導しました。また、K営農組合では播種ムラの低減のために麦用シーダーを活用した播種を提案し、現場で播種機の設定支援を行いました。



ヘアリーベッチの生育量調査

ヘアリーベッチ跡「きらみずき」の収量目標は、栽培暦より480kg/10aに設定しました。ヘアリーベッチをすきこむことによる還元障害を回避するために、通常の中干しを行う前の数日間の軽い中干しや、浅水管理を指導しました。「きらみずき」の生育状況を生産者と確認し、生育状況に応じた穂肥の削減を指導しました。栽培終了後には反省会を生産者と行い、次作に向けた課題と改善策を共有しました。

【普及活動の成果】

M氏のほ場ではヘアリーベッチは湿害を受けずに順調に生育し、4月21日には生育量が3t/10aとなり、目標を達成できました。M氏の「きらみずき」では、適切な水管理と葉色に応じた穂肥散布により、収量は約520kg/10aとなりました。また、ヘアリーベッチの肥効で基肥と穂肥1回分を省略できたため、通常の「きらみずき」栽培と比較し、肥料代を約10,000円/10a抑えることができました。

一方で、K営農組合のほ場ではヘアリーベッチの播種が遅く、目標の生育量に達しませんでした。結果、「きらみずき」の収量は約420kg/10aになりました。現在、ヘアリーベッチは今年度の反省を活かして改善を行い、順調に生育しています。

今後、このモデル経営体を活用し、ヘアリーベッチ跡「きらみずき」の栽培技術を広め、「きらみずき」の栽培面積拡大につなげていきます。

土地利用型経営体における 子実用とうもろこし導入による省力化

【普及活動のねらい・対象】

担い手への農地集積が進むなか、さらなる経営規模拡大に対応するため作期分散や省力化が求められています。そこで、水稻・麦・大豆に比べて省力的で労働生産性の高い「子実用とうもろこし」を導入した輪作体系の確立と、地域への波及を目的に、令和7年から子実用とうもろこし栽培の意向のあった野洲市の土地利用型経営体L社を対象として栽培技術の習得を支援しました。

【普及活動の内容】

対象は取組初年度であったため、栽培技術に関するチェックシートを作成し、作業のスケジュールやポイントを説明しました。ポイントとなる排水対策、播種方法、病害虫防除、収穫適期の判断については重点的に指導を行い、適切に作業ができるように支援しました。

また、地域への波及のため、大規模土地利用型経営体向けの水稻栽培研修会等において、子実用とうもろこしが省力化のひとつの選択肢として認知されるよう、L社での取組内容の共有を行いました。あわせて、子実用とうもろこしの推進には関係機関の協力が必要であることから、子実用とうもろこしの理解促進を目的に、湖南地域の各市とJA等に向け、生産に関する情報提供およびL社での収穫実演会を実施しました。



7月22日の子実用とうもろこし



収穫実演会

【普及活動の成果】

L社の実収量は575kg/10aとなり、目標収量650kg/10aの約9割の収量を確保できました。対象は省力的に栽培できることを実感され、次年度は取組面積を拡大されることとなりました。今年度は、栽培した品種の特性上、収穫が水稻早生品種の収穫時期と重なったため、次年度は品種選定の見直しを行うとともに、収量向上に向け栽培技術の支援をしていきます。

また、関係機関や管内大規模土地利用型経営体への情報提供の際には、栽培技術や使用する機械等に関して様々な質問があり、関心を持って聞いていただきました。今後、子実用とうもろこしが経営規模拡大実現の一助となるよう、引き続き支援をしていきます。

地域農業活性化に向けた広域連携体制の構築

【普及活動のねらい・対象】

管内の集落営農組織では構成員の高齢化が進み、人材不足から営農継続に不安があります。大津市上田上・田上地域の4集落営農法人も同様の課題を抱えているため、数年前から集落営農法人間の広域連携体制の構築について話し合いを続けてきました。令和7年度は、広域連携の実践をすすめることをねらいに、JAレーク滋賀と協力して支援しました。

【普及活動の内容】

各法人の集落内の人材状況や今後の展望について個別に聞き取りを行い、意見を集約することで広域連携の将来像について検討しました。

2か月に1回、JAレーク滋賀と連携して開催している4集落営農法人間の情報交換会にて、広域連携の在り方を提案し、連携に向けたロードマップを提示しました。

広域連携の実践については、ドローンを所有している法人が別法人の薬剤防除を実施できるよう、各法人の間に入って支援しました。

また、集落営農間連携や常時雇用の先進事例を学ぶことを提案し、甲良町の(農)サンファーム法養寺への視察を行いました。

【普及活動の成果】

各法人の聞き取り結果から、将来的な人員不足や過剰な機械投資などが明確となりました。そこで広域連携を通じた機械の共同利用による機械投資の軽減、常時雇用による人員不足の解消を提案しました。

ドローンによる薬剤防除は、4つの集落営農組織間で初めて共同した実践作業例となり、広域連携を一步前進させることができました。調整は難航しましたが、大豆の防除を2法人間で実践できたため、次年度以降は機体の大型化も併せて、水稻、麦、大豆の防除に拡大していく予定です。

また、先進地視察を通じて、広域連携のメリットや組織体制、常時雇用の方法について学びを深めることができ、広域連携体制をイメージいただけました。

今後は、さらに広域連携の実践を支援するとともに、管内の集落営農組織へと波及できるように活動を進めていきます。



ドローン防除による広域連携の実践



先進地視察

大津市における学校給食への取組

【背景】

当センターが構成員として参画している「大津市6次産業化・地産地消推進協議会」は地域資源を活用した6次産業化、地産地消、農商工連携などの事業活動を推進しています。

令和7年度は、本県が実施する「給食から始まり、つながる地産地消推進事業」を活用し、大津市の学校給食における地場産物の利用率向上に取り組んでいます。



協議会で情報共有

【活動内容】

当センターは、大津市内の学校給食で使用されるジャガイモ、キャベツ、タマネギなどの作付計画作成支援や現地指導を行い、計画的な出荷につながりました。また、生産者や関係機関と定期的に打ち合わせを行い、事業の進捗や現地での生育状況について情報共有をしました。協議会では、令和8年度以降も継続して事業に取り組む予定で、引き続き連携して学校給食における地場農産物の利用率が向上するようすすめていきます。

水田を活用した花木類栽培の推進

【背景】

管内の水田には小区画や不成形などの耕作条件不利地があり、その有効活用が求められています。農地の有効活用と収益向上を図るため、省力栽培が可能な花木類を大津市内の集落営農法人や大津市野菜園芸出荷協議会キク部会員を対象に推進しました。

【活動内容】

花木類の推進にあたり、土地利用型作物との作業競合が少なく、冬から春にかけて収穫できるユーカリとサンゴミズキを選定し、推進の研修会を開催しました。

推進の結果、大津市関津、葛川坊村町、伊香立下龍華町の3地区でユーカリとサンゴミズキを合わせて8aの条件不利農地で導入されました。

3年後の成木育成に向けて、施肥管理や整枝・剪定指導を行いモデル経営体として育成し、地域への波及を図ります。



ユーカリの定植指導

担い手の確保・育成に向けて！ (指導農業士会・学校連携事業)

【指導農業士会の活動】

県では、青年農業者の育成に指導的役割を果たしている農業者を指導農業士として認定しており、現在、大津・湖南地域で20名が認定されています。

指導農業士会大津・湖南支部では、青年農業者プロジェクト発表大会での助言や新規就農者への助言指導等を実施しています。また、指導農業士としての資質向上を図るため毎年県内研さんを行っており、今年度は指導農業士会甲賀支部との交流研修を実施しました。

同研修では地域で大規模に農作業受託をされている有限会社共同ファームの地域農業との関わり方等について伺いました。その後の視察研修では、農事組合法人グリーンティ土山で海外輸出に対応した茶栽培管理について、TOMIKAWA GREEN FARMでスマート農業技術導入ハウスと直売施設を視察しました。今後も青年農業者の育成に向け、指導農業士会と連携し、活動していきます。

【学校連携事業の取組】

学校連携事業では、将来の担い手を確保・育成するため、農業高校生が地域農業や就農に対する理解を深める取組を進めています。当センターでは、県立湖南農業高等学校生を対象に、連携講座および青年農業者との交流会を開催しました。

連携講座では、守山びわっこ農園と農業大学校を訪問しました。守山びわっこ農園では、経営者から就農に至った経緯や先進的なトマト・イチゴの栽培技術について説明してもらい、また、農業高校から農業大学校に進学し卒業後に雇用就農された従業員の方と意見交換する場を設けました。さらに、農業大学校では、学生から学生生活や施設について紹介してもらいました。

青年農業者との交流会では、南びわこ青年農業者連合会会員から経営概要やミズナ・ネギ等のハウス栽培について説明してもらい、複数の会員と意見交換する場を設けました。

実施後のアンケートでは、高校生全員が「農業に対する関心が高まった」と回答し、農業大学校の紹介や若手農業者との交流を通じて進学や就農についての理解を深めることができました。



青年農業者プロジェクト発表大会での助言



甲賀地域の農作業受託について学ぶ



守山びわっこ農園の経営概要の説明を受ける



南びわこ青年農業者連合会会員のほ場を見学する

青年農業者クラブの活動支援

当センターでは、青年農業者に対して資質・経営力向上を目的として、先進地視察、プロジェクト活動、および学校教育と連携した活動等を支援しています。

【大津地域青年農業者クラブ^{きらり}季楽里への支援】

(1) 先進地視察支援

当センターから県外の農業情報を提供し、ともに視察先を検討しました。当日は、香川県のFC下笠居と徳島県のアグリクラブ徳島との交流会で活発な情報交換ができるよう支援しました。クラブ員が他県の先進的な栽培や経営の事例などを知ることによって、自身の経営改善に向けて意欲を高めることができました。



FC下笠居のクラブ員視察

(2) プロジェクト活動支援

今年度は、クラブ員10名がプロジェクト活動に取り組みました。当センターでは、課題の検討、計画の策定、発表の練習などの支援を行い、クラブ員の技術・経営力を高めることができました。

(3) 大津市立木戸小学校との連携

同校5年生を対象にクラブ員のほ場で水稻の手植え・稲刈体験を実施され、授業が円滑に進められるよう作業や運営を支援しました。授業を通じて、クラブ員が企画・調整力を身に付けることができました。

【南びわこ青年農業者連合会への支援】

(1) 先進地視察支援

会員に県外の農業情報を提供し、ともに視察先を選定しました。当日は、岡山県でイチゴやバナナの栽培ほ場の視察、倉敷市新農業経営者クラブとの意見交換が円滑に実施できるよう支援しました。会員が先進的な栽培や経営の事例、他県のクラブ活動について知ることによって、自身の経営改善に向けて意欲を高めることができました。



高校生による会員のほ場見学

(2) プロジェクト活動支援

今年度は、会員4名がプロジェクト活動に取り組みました。当センターでは、プロジェクト活動の進め方や取りまとめ方法に助言するとともに、プロジェクト発表大会が円滑に運営できるよう支援を行い、会員の技術・経営力を高めることができました。

(3) 県立湖南農業高等学校との交流会

県立湖南農業高校生を対象に、会員のほ場見学と会員との意見交換会を実施しました。ほ場見学では、高校生へ説明する内容を会員と検討し、現地でも支援しました。意見交換会では、全体を見回しながら高校生が積極的に意見を出せるように促しました。交流会を通じて、会員が改めて自身の経営を見直し、課題を再認識することができました。また、高校生に地域農業への理解や農業への関心を深めてもらうことができました。

表彰事業受章農家の紹介

【令和7年秋の叙勲 黄綬褒章 栗東市 中島豊勝さん】

中島さんは昭和51年に27歳で就農され、工業高等学校で学んだ機械整備の知識や会社勤めの農業資材営業経験を活かし、露地野菜から施設野菜への転換や産地発展のため生協の青果産直センター誘致に取り組み、栗東地域の野菜を主とした契約産地の育成に尽力されました。さらに、栗東いちじく生産組合の設立当初からの組合員で、平成22年から平成31年までの9年間組合長を務め、「りっとう無花果コンサート」を開催するなど、特産品づくりに貢献されました。栽培では、土づくりや有機質肥料主体の施肥、防虫ネットや粘着板などを利用した化学合成農薬の削減技術を導入するなど、環境に配慮した農業に積極的に取り組んでおられます。



また、地元や地域の農業関係組織の役職を積極的に引き受け、そのリーダーシップにより周囲からの厚い信頼を得ておられます。さらに、県の指導農業士を31年間務められ、数多くの県立農業大学校の学生や農業高校の生徒の研修受け入れ、青年農業者組織への助言指導など担い手の確保・育成にも大きく貢献されました。

【農事功績表彰 緑白授有効章 野洲市 吉川五助さん】

昭和40年に就農され、露地野菜を中心に経営を開始されました。吉川生産出荷組合に発足当初から所属し、シュンギクやメロンの産地育成に尽力されました。シュンギク栽培では規模拡大を図りながら、平成2年には組合で共同出荷するシュンギクを「しゅんぎく娘」としてブランド化されました。自家採種した種子を組合員や新規就農者に提供し、優良系統が地域で栽培されるよう努められ、現在はJAレーク滋賀春菊部会で「しゅんぎく姉妹」として共同出荷されています。また、JAとともにメロンの共同選果・共同販売の体制をつくり、「みかちゃんメロン」としてブランド化されました。現在もメロンを経営の基盤として出荷を続け、組合員のほ場を巡回して助言するなど地域ブランドの維持に努めておられます。



平成6年にはトマト栽培を開始し、環境こだわり農産物認証制度に取り組みられ、地域に波及されました。また、野洲市の農業振興計画の作成にあたって振興委員を務められるなど、野洲市の農業生産振興に貢献されました。さらに、県の指導農業士として12年間活動され、青年農業者や新規就農者への助言や指導、農業大学校生の研修や地元の小中学生の農業体験の受け入れなど、次世代の担い手育成にも大きく貢献されました。

表彰事業受賞農家の紹介

【滋賀県農林水産表彰 功労賞 草津市 田中治嗣さん】

平成2年に33歳で就農し、土地利用型経営をされてきました。水稻では、県開発品種や環境こだわり栽培、小麦では、後期重点施肥栽培技術を県内でいち早く導入し、新たな品種や技術の地域への波及に大きく貢献されました。レンコンの地域特産化を目指し、平成27年に栽培を始め、取り組み当初10aだった栽培面積を最大2.4haまで拡大されました。「琵琶湖からすま蓮根」として草津市のブランドになっています。

県指導農業士として12年間活動され、青年農業者のプロジェクト活動への助言、県立農業大学の研修や中学校の職場体験に協力するなど、後継者育成に貢献されました。また、地元小学校のレンコン栽培に関する農業体験学習を長年受け入れ、地消地産や農業に対する理解促進にも尽力されています。

草津用水土地改良区の地元地区委員長として、近隣の4集落の担い手同士の話し合いを主導し、農地集約、農作業効率化に大きく寄与されたほか、令和7年には地区の農地整備事業が着工されました。



【滋賀県農林水産表彰 奨励賞 守山市 川井玲央人さん】

令和2年に就農され「よってこファーム」を立ち上げ、イチジクと小玉スイカ等露地野菜を主に経営を開始されました。環境こだわり農産物認証を受けたイチジクは、甘みが強いと評判で県果樹品評会では特別賞を受賞される等、評価されています。令和5年にはイチジク生産者と関係機関からなる「もりやま湖畔のいちじく振興協議会」を立ち上げ、新規就農者等へ栽培を提案し、生産拡大に寄与されています。また、小玉スイカの品質は、近隣直売所や市場からの評価が高く、経営の主力品目に位置づけ、収穫体験イベントを通して消費者に直接、魅力を伝える活動をされています。さらに、資源循環にこだわった土壌改良にも力を入れておられ、地元産の竹炭やたい肥、ぼかし肥料を利用した土づくりを実践されています。

販売面ではSNSを積極的に活用し、農園の様子発信や、インターネット販売に力を入れ、固定客の確保と新規顧客の獲得に成功されています。

地域の新規就農希望者を研修生や従業員として受け入れることで、自身の経営の規模拡大や人手確保だけでなく、遊休農地の解消に取り組んでいます。また、青年農業者クラブにも加入し、積極的にプロジェクト活動に取り組み経営改善につなげるだけでなく、地区理事を務められ青年農業者の中心としてもますますの活躍が期待されています。



発信情報

【ホームページ】

当センターのホームページでは、本冊子のほか、広報紙「大津・南部の農業」や普及現地情報、技術資料を掲載しています。

右の二次元バーコードからホームページをご覧ください。



【普及現地情報】

今年度は12件の記事を掲載しました(1月9日時点)。

No.	発信日	題名
1	4月24日	南部地域で初！省力・地力向上を目指した子実用とうもろこし栽培開始！
2	5月8日	スキマバイトアプリを活用したアルバイトの確保
3	6月19日	グリーンな栽培体系での水稻増収を目指して！（愛郷米生産組合の研修会開催）
4	7月7日	花きの生産拡大を目指して！（関係機関との花き生産拡大戦略会議を開催）
5	7月28日	栗東市特別栽培米部会で猛暑に打ち克つイネづくりを指導しました
6	8月21日	生産者間のつながりの構築を目指した乾田直播栽培の現地検討会
7	8月28日	アスターの収穫出荷を支援しました
8	9月25日	大津地域青年農業者クラブ「季楽里」の稲刈授業を支援しました
9	9月26日	イチゴ新規就農者への栽培支援で高収量を達成！
10	10月23日	令和8年産小麦「びわほなみ」の品質向上・安定生産に向けて
11	12月25日	バラ栽培の環境にやさしい総合的病害虫防除技術の導入支援
12	1月9日	集落営農法人の広域連携に向けた先進地視察研修を開催

【SNS】

2023年9月にInstagramを開設しました。SNSでは、より多くの方に見ていただけるように、身近な情報を発信しています。

詳細は本冊子の裏表紙をご覧ください。

令和7年(2025年)7月発行

令和7年(2025年) 夏号



大津・南部の農業

●発行元●

滋賀県大津・南部農業農村
振興事務所農産普及課
住 所：草津市草津三丁目14-75
T E L：077-567-5421～5423
F A X：077-564-2510
Email：ga35@pref.shiga.lg.jp

この印刷物は古紙パルプを配合しています

新規就農者が「みおしずく」を活用して経営安定!

滋賀県オリジナルイチゴ品種「みおしずく」は、大津・南部地域で令和6年度に約1.1haが栽培されており、令和7年度は約1.3haに拡大する見込みです。「みおしずく」については、市場等への共同出荷を進めており、当管内では“JAレーク滋賀管内みおしずくグループ”が組織され、取り組まれています。

令和6年3月に新規就農された野洲市のN氏は、ハウス3棟で「みおしずく」「章姫」「よつぼし」の3品種を栽培され、販売は直売所や庭先販売、「みおしずく」では市場出荷もされています。初めての栽培ですが、ハウス面積1,000㎡あたり約6tの収量を確保されました。



出荷調製作業を行うN氏

N氏が「みおしずく」に取り組まれた感想は、「12月初めから収穫でき、果実が大きく収量性も良く、取り組んでよかった。次作では、さらに品種に適した栽培管理を徹底し、今年度よりも冬季の収量を増加させたい」と意欲を示しておられます。また、「市場出荷の販路が最初から確保されていたことで、1年目からの経営安定につながった」と話されています。



12月初めに収穫を迎えた「みおしずく」

当課では、「みおしずく」の収量と品質の向上に向け、研修会の開催や現地での技術支援を通して市場出荷向けの生産拡大を進め、イチゴ経営の安定を図ります。



大津・南部農業農村振興事務所では、管内の農業・農村振興情報をFacebook、Instagramで発信しています。今後も農業用水工事や産地、栽培技術、イベントなどの情報を発信しますので、ぜひご覧ください。



Facebook



Instagram

令和7年(2025年)7月発行

省力化と作期分散を目指した水稲直播栽培の取組!

水稲直播栽培は、移植栽培と比べて省力化や作期分散ができるため経営規模の拡大が可能になります。管内で取り組む農業者が増えている湛水直播と乾田直播について紹介します。

湛水直播

代かき後のほ場に資材でコーティングされた水稲種子を直接播種する方式です。苗立ちが不安定でコーティングに手間がかかるなどの課題もありましたが、湛水直播用コーティング処理済種子が発売され、取り組みやすくなりました。播種には乗用播種機やドローンを用います。

ドローンでの播種



乾田直播

乾田状態のほ場に乾もみを直接播種する方式です。麦・大豆栽培で使用する機械(播種機、レーザーレベラー、乗用管理機)を利用できます。播種可能時期が3月～6月と長く、作期分散が可能です。播種にドリルシーダを用いると約10km/hで播種できます。

ドリルシーダでの播種



スクミリンゴガイ対策は冬期耕うんが決め手!

スクミリンゴガイ(通称ジャンボタニシ)は南米原産の淡水に生息する巻貝の一種です。1980年代に食用目的で輸入され、後に野生化した貝が生育初期の稲を加害し問題となっています。

スクミリンゴガイの水稲への被害防止対策として、水稲収穫後に実施できる「冬期耕うん」について紹介します。「冬期耕うん」は、厳冬期前の12月頃にロータリ耕うんを行うことにより、越冬のため深さ6cmまでの土中に潜っている貝を破砕し、寒風にさらして殺貝します。

作業は以下の点に留意して実施するとより効果的です。

- 越冬貝は、ほ場の短辺部が最も多く、長辺部、中央部と少なくなります。
- 越冬貝が多い場所を重点的にロータリの回転を速くし、走行速度をできる限り遅くすることで貝の破砕効果が高まります。



新規クラブ員募集中! 青年農業者クラブの紹介

管内の青年農業者クラブには、水稻、露地野菜、施設野菜、果樹などを栽培する青年農業者が参画しています。当課は、クラブに対して、経営上の課題解決に取り組むプロジェクト活動や、高度な栽培技術や経営感覚に優れた農業経営を学ぶ先進地視察研修等を支援しています。

天津地域青年農業者クラブ季楽里^{きらり}は、天津市の青年農業者11名で構成されています。南びわこ青年農業者連合会は、草津市、守山市、栗東市、野洲市の青年農業者16名で構成されています。新規クラブ員も募集しており、入会の参考となるよう、令和6年度の活動を紹介します。

プロジェクト活動

「果樹のブランド化や販売方法の検討」「野菜や水稻の収量向上」等に取り組み、課題解決につながりました。

特に、県のプロジェクト発表大会では、「スイートコーンの収量向上」の取組が、施肥や防除体系などの検討により大幅に収量向上した点が評価され、優秀賞に選ばれました。



先進地視察研修

天津地域青年農業者クラブ季楽里は、広島県の最大のトマト産地等を視察し、気候変動に対応した品種や新技術の導入、加工品開発での工夫などを研修されました。

南びわこ青年農業者連合会は、香川県の若手従業員教育に力を入れている経営体等を視察し、経営ビジョンを作成し改善に向けて業務を「見える化」する重要性や従業員教育の手法を研修されました。



先進経営体を視察する季楽里(上)と南びわこ青年農業者連合会(下)

このような活動を通じ、仲間づくりや県内外の青年農業者とも情報交換しながら切磋琢磨し、経営改善に取り組まれています。各クラブではさらに活発な活動を展開したいと考えており、新規クラブ員を募集しています。興味のある方は、当課までお問い合わせください。

滋賀県立農業大学校の入学・入校生募集のお知らせ

	養成科 (修業年限2年、募集定員30名)	就農科※ (研修期間1年、募集定員15名)
願書受付期間	推薦: 令和7年10月3日(金)~10月16日(木) 一般: 令和7年11月18日(火)~12月1日(月)	一次: 令和7年11月14日(金)必着 二次: 令和8年1月23日(金)必着
特色	●短期大学卒業と同等に扱われる ●在学中に多くの免許や資格が取得できる講習を受けられる	●就農に向け、専門分野のきめ細かい指導が受けられる ●養成科の授業も受講でき、養成科同様に多くの資格試験の受験機会がある

※令和8年度入校就農科の募集要領に変更がありました。詳細はHPをご覧ください。

農業大学校HPはこちら▶



令和7年(2025年)7月発行

農業経営のステップアップを支援します!

当課では、農業者の経営改善に向けた取組を支援しております。普及指導員が法人化や雇用等の経営に関する相談、6次産業化部門の立ち上げ等、挑戦したいことについて聞き取りし、現在の経営状況に基づいた助言を行っています。必要に応じて、以下に紹介する制度を利用してアドバイザーやプランナーを派遣し、専門的で具体的な支援を受けることもできます。各制度とも、随時申込相談を受け付けていますのでお気軽にお問い合わせください。

農業経営支援アドバイザー派遣制度

制度を利用できる主な相談内容

◆制度の紹介◆

右図に示すような色々な経営上の問題に対して、農業分野に詳しい税理士、中小企業診断士、社会保険労務士等の専門家から助言を受けられる支援制度です。

- | | |
|---|--|
| ①法人化 (税理士・中小企業診断士等) <ul style="list-style-type: none"> ●法人化すべきか(メリット・デメリット) ●設立の手続きをどうしたらよいか ●法人へ移行する際の注意点は何か | ②経営改善 (中小企業診断士等) <ul style="list-style-type: none"> ●現在の経営状況を把握したい ●作業を効率化し生産性を向上したい ●中期計画の立て方を教えてほしい |
| ③雇用・労務 (社会保険労務士等) <ul style="list-style-type: none"> ●就業規則の作成の仕方について知りたい ●社会保険制度を整備したい ●従業員の満足度を高め、定着させたい | ④経営継承 (税理士・中小企業診断士等) <ul style="list-style-type: none"> ●継承の流れ・注意点がわからない ●継承にあたり法人化すべきか ●第三者継承する際の注意点は何か |

◆制度活用事例◆

令和6年度は7経営体(法人化2件、経営改善1件、雇用・労務2件、経営継承2件)が制度を利用されました。野洲市の事例では、本制度を利用して税理士と中小企業診断士との個別相談会を行い、機械や施設等の固定資産や経営権の移譲の流れについて助言を受け、令和7年3月の事業継承に繋がられました。



農山漁村発イノベーションプランナー派遣制度

◆制度の紹介◆

この制度では、自社の農産物等の地域資源を活用し、新しい商品やサービスの創出にチャレンジされる農業者に対して、コンサルタント、デザイナー等専門家を派遣し、経営改善と課題解決をサポートしています。農業者自身のニーズに沿い、新商品開発、ロゴ・パッケージ等のデザイン、販路拡大、経営分析、戦略づくり、デジタル化等、多岐にわたる分野においてアドバイスを受けることができます。令和7年度は4経営体が活用中です。



専門家(デザイナー)作成の開園PRうちわ型チラシ

◆制度活用事例◆

野洲市の事例では、イチゴ観光農園の開園に向けて、本制度を活用されました。まず、当課との打合せで開園までの課題を明確にし、次に、その解決に向けて専門家から支援を受けられました。具体的には、コンセプトの明確化、事業計画の作成、開園PRチラシの作成に関する助言を受けられました。その結果、構想から実行まで短期間で進めることができ、計画通り令和7年1月に開園されました。

令和8年(2026年) 春号



●発行元●

滋賀県大津・南部農業農村振興事務所農産普及課

住 所：草津市草津三丁目14-75

T E L：077-567-5421～5423

F A X：077-564-2510

Email：ga35@pref.shiga.lg.jp

この印刷物は古紙パルプを配合しています

大津・南部の農業

暑い夏に儲ける! ハウスでの花き栽培のすすめ

近年、施設園芸では夏の異常な高温の影響で発芽や生育が不良となり、夏場に安定した収益確保が難しくなっています。特に軟弱野菜経営で収益性が下がっています。

そこで当課では、夏の間に既存のハウスを活用し、高温に比較的強く、需要が見込める花き品目を導入して収益性を向上させることを提案しています。花き品目の中でもアスターは次のような利点があります。

- 気象の影響を受けにくく、需要の多い時期に合わせて収穫できる。
- 購入苗ではなく種子から栽培できるため、導入にかかる費用が比較的少ない。

一方で、アスターは連作障害が起きやすく、全国的に安定した産地が少ない品目です。しかし、大津・南部地域に多い複数のハウスを持つ軟弱野菜の経営体であれば、連作を避けるための輪作体系を組むことで、持続的な生産が可能となります。

今夏の異常高温下でのコマツナ栽培と比較すると、210㎡のハウス1棟あたりで、約32万円の売上増加と25万円の増益する結果となりました（下表参照）。

アスターの導入をご検討される方は、農産普及課までお気軽にご相談ください。



ビニールハウスを利用したアスターの栽培



あずみスカーレット

表) アスターとコマツナの経営収支の比較 (210㎡あたり)

	アスター	コマツナ 異常高温下・2作
粗 収 益	520,000 (円)	189,500 (円)
経 費	167,180 (円)	103,800 (円)
粗 利 益	352,820 (円)	85,700 (円)
作業時間	73.3 (時間)	93.8 (時間)

アスターの作型	4月	5月	6月	7月	8月	9月
	7～8月咲	播種	定植		収穫	
	8～9月咲		播種	定植		収穫
コマツナ 作付期間						

大津・南部農業農村振興事務所では、管内の農業・農村振興情報をFacebook、Instagramで発信しています。今後も農業用水工事や産地、栽培技術、イベントなどの情報を発信しますので、ぜひご覧ください。



Facebook



Instagram

令和8年(2026年)2月発行

管内イチジク産地の紹介

今浜いちじく生産組合

守山市の今浜いちじく生産組合は平成9年に5名の生産者が「ドーフィン」を栽培したことがきっかけで組織されました。環境こだわり農産物認証制度にいち早く取り組まれ、毎年堆肥を施用するなど、こだわった土づくりをされています。一時は組合員の高齢化などにより栽培面積が減少しましたが、令和3年から5名の新規生産者が組合に加入し、現在は7名で約115aの面積に拡大しています。新規生産者が増え、栽培技術研修会などで既存生産者からの技術継承が行われています。令和4年には商品名を「もりやま湖畔のいちじく」と変更し、ブランド力を高めるとともに、ふるさと納税の返礼品に登録するなど販路拡大も行われています。



栽培技術研修会

栗東いちじく生産組合

栗東いちじく生産組合は平成5年に「ドーフィン」の栽培を開始され、現在は13名の組合員が約100aのほ場で生産しています。令和7年6月には「栗東いちじく」として地域団体商標に登録されました。全組合員がビニールハウスによる雨よけ栽培を行い、環境こだわり農産物認証制度に取り組むなど、品質にもこだわって栽培しています。同組合の強みは、その日に収穫した果実を出荷する「朝採り収穫」と、ハウス栽培による7月下旬から10月頃までの長期収穫で、市場や直売所、洋菓子店など、幅広い販路を確保しています。



収穫作業

直売所では、栗東いちじくを手作りで加工した「栗東いちじくジャム」が販売されており、地域の誇るブランドとして今後さらに注目が高まることが期待されています。

夏季の高温に備えましょう!(稲づくり)

令和7年の夏の高温により、水稻の生育障害や品質の低下が発生しました。近年の高温傾向はこれからも続くと予想されるため、対策を紹介します。

✓ 土づくり

高温の影響で消耗しているほ場の地力を維持・向上させるため、農閑期に土づくり資材や堆肥を積極的に施用しましょう。なお、土づくりはすぐに効果が出るものではないため、長期的な視点での継続が重要です。

✓ 生育後半の肥効維持

高温の影響で水稻の生育後半は肥効が持続せず、栄養ちょう落による白未熟粒の増加で品質が低下しがちです。葉色をこまめに観察し、一発肥料体系では穂肥の施用を、分施肥体系では穂肥の増量を検討しましょう。



詳しくはこちら

(近江米振興協会HP)

経営規模拡大を見据えた子実用とうもろこし栽培

「子実用とうもろこし」とは、完熟した子実だけを収穫し、家畜の飼料として利用されとうもろこしです。管内では、令和4年より、大津市において地域内の耕畜連携を目的として栽培が始まりました。この作物は、大規模土地利用型経営体の場合、大きな機械投資を必要とせず、播種には大豆用の播種機(耕うん同時畝立て播種機や高速畝立て播種機)、収穫には汎用コンバインの刈り取り部にコーンヘッダまたはリールヘッダを取り付けることで対応可能です。また、種子の購入、品質検査、収穫物の出荷は、生産者で構成される「滋賀県子実コーン組合」で一括して行われます。さらに、「子実用とうもろこし」は水稻、麦、大豆に比べて省力的に栽培できるため、経営規模の拡大を目指す担い手にとって有望な作物と考えられます。

令和7年からは、規模拡大や作業の省力化を目的として、野洲市の土地利用型経営体も栽培を始めており、初年度から十分な収量を確保されました。令和8年はさらなる収量・品質の確保に向けて取り組まれるとともに、今後の経営規模拡大を見据え、栽培面積を拡大される予定です。



高速畝立て播種機



専用コーンヘッダ

農業濁水の流出を防ぎましょう



農業濁水の流出を防ぐために以下の管理ポイントをおさえ、琵琶湖の環境を守りましょう!



① 丁寧に耕起作業を行い、ほ場を均平にしましょう。



② 畔の補修や止水板を適切に設置し、漏水防止に努めましょう。



③ 計画的に入水し、土が7～8割見える状態で代かきを行いましょう。

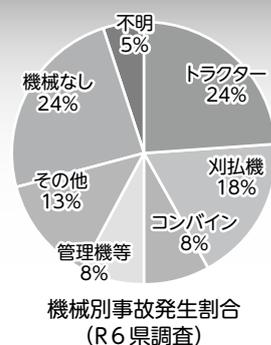


④ 田植前に落水せず、代かき後は速やかに移植・播種しましょう。

農作業事故に注意!!

令和6年度に県内で発生した農作業事故のうち、トラクターと刈払機による事故の割合が大きく、全体の約4割を占めています。ヘルメットやシートベルト、フェイスガードや安全靴などの装備を必ず着用し、周囲の安全も確認し、事故を回避しましょう。

また、熱中症による死亡者が全国的に増えています。高温時の作業を避ける、のどが渇く前にこまめな水分補給を行う、帽子や空調服等を着用するなど予防に取り組みましょう。



令和8年(2026年)2月発行

新規就農者の紹介

宇田裕紀さん

宇田さんは、園芸専門学校での研修後、茨城県や県内の生産者のもとで働きながら技術習得を進めてこられました。令和6年12月に草津市内の空き温室を購入し、令和7年春から「うっちゃんファーム」として栽培に取り組まれています。春はメロンやオクラ、秋はキュウリやレタスを有機質肥料で栽培し、近隣の直売所等で販売されています。将来は、モモ栽培にもチャレンジしたいと考えておられ、「草津の野菜といえば、うっちゃんファーム」と言われるよう頑張っていきたいと強い意欲を持たれています。



北川昌之さん



北川さんは、民間企業を退職後、県内2戸の果樹生産者のもとで2年間研修を受け、令和7年4月から守山市服部町で、ブドウ20a・ナシ26a・小ギク10aの農業経営を開始されています。ブドウでは根域制限栽培、ナシでは低樹高栽培を導入し、早くから安定した収量が得られる園地づくりに取り組んでおられます。小ギクは、お盆やお彼岸の需要時期に合わせて、市内の直売所を中心に出荷されました。今後も地域の果樹・花き生産を支える存在として活躍が期待されます。

未来の担い手確保に向けた学校連携の取組

県では、担い手の確保・育成に向け、農業高校生を対象に就農意欲を高める取組を進めています。当課は湖南農業高校と連携し、12月9日に連携講座、17日に青年農業者との交流会を実施しました。連携講座では、守山びわこ農園と農業大学校を訪問し、先進的な栽培技術や経営を学ぶとともに、農大生から学生生活や将来の就農について話を聞きました。交流会では、南びわこ青年農業者連合会の協力を得て、会員のほ場見学や意見交換を行い、地域農業をより身近に感じてもらう機会となりました。参加した生徒からは「進路を考える参考になった」、「農業を仕事にするイメージが具体的になった」などの感想が寄せられ、農業を進学先や職業選択の一つとして考えるきっかけになりました。



農業大学校の見学

令和7年度 大津・南部地域普及活動実績集

【発行】

令和8年(2026年)3月

滋賀県大津・南部農業農村振興事務所農産普及課
(大津・南部農業普及指導センター)

滋賀県草津市草津三丁目14-75

TEL 077-567-5421~23

FAX 077-564-2510

Mail ga35@pref.shiga.lg.jp

【印刷】

有限会社柳印刷店

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS



大津・南部農業農村振興事務所では、当所の活動や管内の魅力的な農業・農村情報を Facebook、Instagram「Face to アグリ大津・南部」で発信しています。
二次元バーコードからご覧ください。



Facebook



Instagram

この印刷物はグリーン購入法適合用紙を使用しています。